

【 復活のトロパリ 第2調 】



し せ ぎ る い の ち よ 、 な ん ぢ し に く だ り し
死 生 命 爾 死 降
と き 、 か み の せ い の ひ か り に て ぢ ご
時 神 性 光 地 獄
く を こ ろ せ り 。 し せ し も の を ち か よ
殺 死 者 地 下
り ふ く か つ せ し め し と き 、 て ん ぐ ん み な
復 活 時 天 軍 皆
よ び て い え り 、 い の ち を た も う し ゆ
呼 曰 生 命 を 賜 う 主
ハ リ ス ト わ が か み よ 、 こ う え い は な ん ぢ に
吾 神 み よ 、 光 榮 は 爾 に
き 歸 す 。

【 顯榮祭のトロパリ 第7調 】



ハ リ ス ト ス か み よ 、 な ん ぢ は や ま に お い て へ ん
神 爾 山 於 變
よ う し て 、 な ん ぢ の も ん と に そ の ち か ら に か
容 爾 門 徒 其 力 稱
な い て な ん ぢ の こ う え い を あ ら わ し た ま
爾 光 榮 を 顯 給
え り 。 ね が わ く は し ょ う し ん ぢ ょ の き と う に よ
願 生 神 女 祈 禱 因

りて、われらつみなるものにもなんぢのえ
我等罪者爾永

いざいのひかりはかがやかん。ひかりをほど
在光輝光施

こすしゅよ、こうえいはなんぢにきす。
主光榮爾歸

【 顯榮祭のコンダク 第7調 】

こうえいはちちとこいとせいしんにき
光榮父子と聖神に歸

す。

ハストスカみよ、なんぢがやまにいてへんよう
神爾山於變容

せしとき、なんぢのもんとはいるるにかな
時爾門徒容稱

いてなんぢのこうえいを見たり、こ此
爾光榮見

れなんぢのじゅうじかにていせらるるを見
爾十字架釘見

くるしみのじゅうなるをさとり、なんぢが
苦自由悟爾

じつにちちのこうえいなるをせかいにつた
實父光榮なるを世界に傳



【 復活のコンダク 第2調 】

いまもいつもよよに、アミン。
今 何 時 世 世

ぜんのかのきゅうせいしゅよ、なんぢはかよりふ
全 能 救 世 主 爾 墓 復

くかつせしに、ぢごくはきせきをみて
活 せ し 地 獄 は 奇 蹟 を 見

おののき、ししやはおき、ぞうぶ
慄 の 死 者 起 造 物

つはみてなんぢとともによろこび、アダムは
見 爾 と 偕 喜

ともにたのしみ、わがきゅうせいしゅ
共 樂 我 救 世 主

よ、せかいはつねになんぢをほめうた
世 界 常 爾 讃 歌

う。

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有
となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾
り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に
痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が

^{せい}なる^{さいだん}祭壇の^{こうえい}光榮の^{まえ}前に立ちて、^{なんぢ}爾に^{とうぜん}當然の^{ふくはいさんえい}伏拜讚榮を^{たてまつ}奉るに^た堪うる
^{もの}者となしし^{しゅさい}主宰よ、^{なんぢみづか}爾親ら^{われらざいにん}我等罪人の^{くち}口よりも^{せいさん}聖三の^{うた}歌を受け、^{なんぢ}爾の
^{じんじ}仁慈を^{もつ}以て^{われら}我等に^{のぞ}臨み、^{われら}我等に^{およ}凡そ^{じゆう}自由と^{じゆう}自由ならざる^{つみ}罪を^{ゆる}赦し、^わ我が^{たましい}靈
^{からだ}と^{せい}體とを^{われら}聖にし、^{しょうがいぜんこう}我等に^{もつ}生涯善功を^{なんぢ}以て^{つと}爾に^え務むるを得^{たま}せしめ^{せい}給え、聖
^{しょうしんぢよ}なる^{こせい}生神女と^{なんぢ}古世より^{よろこび}爾の^な喜を^{しよせいじん}爲しし^{きとう}諸聖人との^よ祈禱に^{せい}依りてなり、)

司祭) ^{けだしわ}蓋我が^{かみ}神よ、^{なんぢ}爾は^{せい}聖なり、^{われらこうえい}我等光榮を^{なんぢちち}爾父と^こ子と^{せいしん}聖神に^{けん}献ず、^{いま}今も^{いつ}何時も^{よよ}世世

に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じ ェ ー ス の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 者 我 等 憐
 よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 な る じ ェ ー ス の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
 常 生 者 我 等 憐
 め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
 聖 神 聖 勇 毅
 せ い な る じ ェ ー ス の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐



れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
光 榮 父 子 聖 神
に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
歸 今 何 時 世 世
せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐
れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
聖 神 聖 勇
き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
毅 聖 常 生 者 我 等
をあわれめよ。
憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 主日第2調 及び顯榮祭第4調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、第二の調、主は、我が力、我が歌なり、彼は我が救となれり、



しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ
主 我 力 我 歌 彼 我
が す く い と な れ り 。
救

誦經) 主は厳しく我を罰したれども、我を死に付さざりき、



しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ
主 我 力 我 歌 彼 我
が す く い と な れ り 。
救

誦經) ^{だいし しらべ しゅ なんぢ しわざ なん おお みなちえ もつ つく} 第四の調、主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作れり、



しゅ よ 、 なんぢ の し わ ざ は なんぞ おお き 、
主 爾 工業 何 大
み な ち え を も っ て つ く れ り 。
皆 智慧 以 作

【 アポストロス 使徒經 141 端 コリント前書 9 章 2～12 節

及び 65 端 聖使徒ペトルの後公書 1 章 11～19 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ ぜんしよ よみ} 聖使徒パウエルがコリント人に達する前書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聴くべし、

誦經) ^{けいてい なんぢら しゅ おい われ しとしよく いん われ ぎ もの わ こた ところこれ} 兄弟よ、爾等は主に於て我の使徒職の印なり。我を議する者に我が答うる所是

^{われらあにくら の けん われらあにしまい つま たづさ た しとおよ しゅ} なり。我等豈食い飲むに權なきか。我等豈姉妹なる妻を攜うることを、他の使徒及び主の

^{けいてい およ ごと しか けん そもそもひとりわれ こうさく けん} 兄弟、及びキファの如く然る權なきか。抑獨我とヴァルナヴァとは工作せざる權な

^{だれ ぐんし な おのれ きゅうよう もつ つと だれ ぶどう う そのみ くら} きか。誰か軍士と爲りて、己の給養を以て勤むるをせん。誰か葡萄を樹えて、其果を食

^{だれ むれ ぼく むれ ちち くら われただひと じょう したが これ い} わざらん。誰か群を牧して、羣の乳を食わざらん。我唯人の情に循いて之を言うか。

^{りつぽう またか い あら けだし りつぽう しる いわ こくもつ ふ おと うし} 律法も亦斯く言うに非ずや。蓋モイセイの律法に録して云く、穀物を踐み落す牛には

^{くち と なか かみ うし ため おもんばか そもそもこれ い こと われら ため} 口を閉づる勿れと。神は牛の爲に慮るか。抑之を言うは、特に我等の爲にするか。

^{こ われら ため しる けだしたがえ もの のぞみ たがえ こくもつ ふ おと もの} 是れ我等の爲に録されたり、蓋耕す者は、望ありて耕すべし、穀物を踐み落す者

^{そのきぼう ところ う のぞみ これ な も われなんぢら うち しん ぞく もの} は、其希望する所を獲る望ありて之を爲すべし。若し我爾等の中に神に屬する物を

^{ま なんぢら み ぞく もの か あにだいじ も たにんこ けん なんぢら うち} 播きたらば爾等の身に屬する物を獲るは、豈大事ならんや。若し他人此の權を爾等の中

え いわん われら しか われら こ けん もち すなわちおよそ こと しの
に獲ば、況や我等をや。然れども我等は此の權を用いざりき、乃凡の事を忍ぶ、ハ
リストスの福音に聊も阻礙を置かざらん爲なり。

(比較用 口語訳) あなたがたが主にあることは、わたしの使徒職の印なのである。わたしの批判者たちに対する弁明は、これである。わたしたちには、飲み食いをする権利がないのか。わたしたちには、ほかの使徒たちや主の兄弟たちやケパのように、信者である妻を連れて歩く権利がないのか。それとも、わたしとバルナバとだけには、労働をせずにいる権利がないのか。いったい、自分で費用を出して軍隊に加わる者があろうか。ぶどう畑を作っていて、その実を食べない者があろうか。また、羊を飼っていて、その乳を飲まない者があろうか。わたしは、人間の考えでこう言うのではない。律法もまた、そのように言っているではないか。すなわち、モーセの律法に、「穀物をこなしている牛に、くつこをかけてはならない」と書いてある。神は、牛のことを心にかけておられるのだろうか。それとも、もつぱら、わたしたちのために言うておられるのか。もちろん、それはわたしたちのためにしるされたのである。すなわち、耕す者は望みをもって耕し、穀物をこなす者は、その分け前をもらう望みをもってこなすのである。もしわたしたちが、あなたがたのために霊のものをまいたのなら、肉のものをあなたがたから刈りとるのは、行き過ぎだろうか。もしほかの人々が、あなたがたに対するこの権利にあずかっているとすれば、わたしたちはなおさらのことではないか。しかしわたしたちは、この権利を利用せず、かえってキリストの福音の妨げにならないようにと、すべてのことを忍んでいる。

誦經) けいてい ますますべんれい なんぢら め こと およ えら こと けんご これら
兄弟よ、益勉勵して、爾等の召されし事、及び選ばれし事を堅固にせよ、此等を

おこな なが つまづ けだししか ごと なんぢら われら しゅきゅうしゅ
行いて、永く躓かざらん。蓋此くの若くば、爾等に我等の主救主イイススハリス

えいえん くに い おんけい ゆたか くわ ゆえ なんぢらこれ し かつすで う
トスの永遠の國に入る恩恵は裕に加えられん。故に爾等此を知り、且既に受けたる

しんじつ かた われ つね なんぢら これら こと きねん や われ
眞實に堅められたれども、我は恒に爾等に此等の事を記念せしむるを怠めざらん。我は

こ まく あ とき こ きねん もつ なんぢら はげ とうぜん こと おも けだしわれ
此の幕に在る時、此の記念を以て爾等を勵ますは、當然の事なりと思えり、蓋我は

わ まく だつ ちか し わ しゅ われ しめ ごと しか
我が幕を脱せんことの近きを知る、我が主イイススハリストスの我に示ししが如し。然れ

われ わ さ のち なんぢら つね これら きねん つと けだしわれら たくみ
ども我は我が去らん後にも爾等の常に此等を記念することを勉めん。蓋我等は、巧

きよせつ したが なんぢら わ しゅ のうりよく こうりん つ あら
なる虚説に従いて、爾等に我が主イイススハリストスの能力と降臨とを告げしに非

すなわちそのいこう した み もの しか けだししだい こうえい こえ かれ きた
ず、乃其威光を親しく見たる者として然せり。蓋至大なる光榮より聲の彼に來り

これ われ しあい こ わ よろこ もの い とき かれ かみちち そんき こうえい
て、此は私の至愛の子、我が喜べる者なりと曰いし時、彼は神父より尊貴と光榮とを

う てん きた こ こえ われらかれ とも せい やま あ とき これ き かつわれ
受けたり。天より來りし此の聲は、我等彼と偕に聖なる山に在る時、之を聞けり。且我

ら さら たしか よげんしゃ ことば なんぢら これ くら ところ かがや ともしび てんあ
等に更に確なる預言者の言あり、爾等が之を暗き處に耀く燈として、天明

あさのほし なんぢら こころ い いた かえり よ
け、晨星の爾等の心に出づるに至るまで顧みるは善し。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。それだから、ますます励んで、あなたがたの受けた召しと選びとを、確かなものにしなさい。そうすれば、決してあやまちに陥ることはない。こうして、わたしたちの主また救主イエス・キリストの永遠の国に入る恵みが、あなたがたに豊かに与えられるからである。それだから、あなたがたは既にこれらのことを知っており、また、いま持っている真理に堅く立ってはいるが、わたしは、これらのことをいつも、あなたがたに思い起させたいのである。わたしがこの幕屋にいる間、あなたがたに思い起させて、奮い立たせることが適当と思う。それは、わたしたちの主イエス・キリストもわたしに示して下さったように、わたしのこの幕屋を脱ぎ去る時が間近であることを知っているからである。わたしが世を去った後にも、これらのことを、あなたがたにいつも思い出させるように努めよう。わたしたちの主イエス・キリストの力と来臨とを、あなたがたに知らせた時、わたしたちは、巧みな作り話を用いることはしなかった。わたしたちが、そのご威光の目撃者なのだからである。イエスは父なる神からほまれと栄光とをお受けになったが、その時、おごそかな栄光の中から次のようなみ声がかかったのである、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。わたしたちもイエスと共に聖なる山にいて、天から出たこの声を聞いたのである。こうして、預言の言葉は、わたしたちにいつそう確かなものになった。あなたがたも、夜が明け、明星がのぼって、あなたがたの心の中を照すまで、この預言の言葉を暗やみに輝くともしびとして、それに目をとめているがよい。

【 アリルイヤ 主日第2調 及び顕榮祭第8調 】

司祭) なんぢ へいあん、
爾 に 平 安、

誦経) なんぢ しん
爾 の 神 にも、

司祭) えいち
睿 智、

誦経) アリルイヤ、^{ねが}願わくは主は^{しゅ}憂^{うれい}の日に^ひ於て^{おい}爾^{なんぢ}に^き聴き、^{かみ}イアコフの神の名は^な爾^{なんぢ}を^{ふせ}扨ぎ衛^{まも}

らん、



誦経) しゅ おう すく またわれら なんぢ よ とき われら き たま
主よ、王を救え、又我等が爾に呼ばん時、我等に聴き給え、



誦經) ^{てん なんぢ ぞく ち なんぢ ぞく} 天は 爾 に屬し、地も 爾 に屬す、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ し} 人を愛する主 宰よ、我が 心 に神を知る智慧の 淨 き 光 を 輝 かし、我が思

^{ねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} 念の目を啓きて、爾 が福 音の 教 を 悟らしめ 給え、我が衷に 爾 の福たる 誠

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ} を畏るる 畏 をも入れて、我等が 悉 くの肉 體の慾を踏み、凡そ 爾 の 喜 ぶ

^{ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} 所 を思い且つ 行 いて、屬 神の 生活 を過ぐるを致させ 給え、 蓋 ハリストス神

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいし} よ、 爾 は我が 靈 と 體 との 光 照 なり、我等 爾 と 爾 の無原の父と至聖至

^{ぜん いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} 善にして生命を 施 す 爾 の神とに 光 榮 を 獻ず、 今も何時も 世 世に、アミン。)

エヴァンゲリオン

【 福 音 經 マトフェイ福音書 77 端 18 章 23～35 節

及びマトフェイ福音書 70 端 17 章 1～9 節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、 肅 みて立て聖 福 音 經 を聴くべし、 衆 人 に 平 安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} マトフェイ傳の聖 福 音 經 の 讀、



司祭) ^{つつし き しゅ さ たとえ もう い てんこく そのしょぼく かいけい ほつ} 謹 みて聴くべし、主は左の 譬 を 設けて曰えり、天 國 は、其 諸 僕 と 會 計 せんと 欲 せ

^{くんおう に かいけい はじ と き いっせんまんきん おいめ もの かれ ひ きた その} し 君 王 に似たり。會 計 を 始めし 時、一 千 萬 金 の 債 ある者を彼に 曳き 來れる あり。其

^{つぐの あた よ しゅ かれ み そのさいし そのことごと しょう いう ひさ} 償 うこと 能わざるに 因りて、主は彼の身と、其 妻 子 と、其 悉 くの 所 有 とを 鬻 ぎて、

つぐの 償 わんことを命ぜり。其 僕 俯伏して、彼を拜して曰えり、主よ、我を寛うせよ、我 盡
 なんぢ つぐの 償 わん。其 僕 の主は 憐 みて、彼を釋ち、彼に 償 を免せり。其 僕 出でて、
 ひとり とも おのれ ぎんいっびやく おいめ もの あ これ とら のど し い なんぢ
 一人の同僚の、己に銀 一 百 の 償 ある者に遇いて、之を執え、喉を扼めて曰えり、爾
 お ところ われ つぐの 償 え。其 同僚 彼の 足下に俯伏して、求めて曰えり、我を寛うせよ、我
 ことごと なんぢ つぐの 償 わん。然れども、彼 肯 わず、乃 往きて、其 償 を 償 うに至るまで、
 これ ひとや くだ た ともこれ み はなはだうれ きた あ ところ ことごと しゅ つ
 之を獄に下せり。佗の同僚之を見て、甚 憂い、來りて有りし 所 を 悉 く主に告げ
 たり。其 時 主は彼を召して曰く、惡しき僕よ、 爾 我に求めしに因りて、我 其 償 を
 ことごと なんぢ ゆる わ なんぢ あわれ ごと なんぢ またなんぢ とも あわれ あら
 悉 く 爾 に免せり、我が 爾 を 憐 みし如く、 爾 も亦 爾 の同僚を 憐 むべきに非ず
 しゅすなわちいか そのことごと おいめ つぐの いた かれ ごくり わた も なんぢ
 や。主 乃 怒りて、其 悉 くの 償 を 償 うに至るまで、彼を獄吏に付せり。若し 爾
 ら おのおの そのこころ おのれ けいてい そのつみ ゆる わ てん ちち またか ごと なんぢら
 等 各 其 心 より 己 の 兄 弟 に 其 罪 を 免 さ ず ば、我 が 天 の 父 も 亦 斯 くの 如 く 爾 等 に
 おこな
 行 わん。

(比較用 口語訳) 天国は王が僕たちと決算をするようなものだ。決算が始まると、一万タラントの負債のある者が、王のところに連れられてきた。しかし、返せなかったので、主人は、その人自身とその妻子と持ち物全部とを売って返すように命じた。そこで、この僕はひれ伏して哀願した、『どうぞお待ちください。全部お返しいたしますから』。僕の主人はあわれに思つて、彼をゆるし、その負債を免じてやった。その僕が出て行くと、百デナリを貸しているひとりの仲間に出会い、彼をつかまえ、首をしめて『借金を返せ』と言つた。そこでこの仲間はひれ伏し、『どうか待ってくれ。返すから』と言つて頼んだ。しかし承知せずに、その人をひっぱって行つて、借金を返すまで獄に入れた。その人の仲間たちは、この様子を見て、非常に心をいため、行つてそのことをのこらず主人に話した。そこでこの主人は彼を呼びつけて言つた、『悪い僕、わたしに願つたからこそ、あの負債を全部ゆるしてやったのだ。わたしがあわれんでやったように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか』。そして主人は立腹して、負債全部を返してしまうまで、彼を獄吏に引きわたした。あなたがためいめいも、もし心から兄弟をゆるさないならば、わたしの天の父もまたあなたがたに対して、そのようになさるであらう」。

司祭) か とき 彼の時、イイススはペトル、イアコフ、イオアンを 攜 え、 獨 彼等を率いて、高き山に登
 かれら まえ かたち か そのおもて ひ ごと かがや そのころも ひかり ごと しろ
 り、彼等の前にて 容 を變えたり、其 面 は日の如く耀き、其 衣 は光の如く皎くな
 み およ あらわ かれ とも かた とき い
 れり。視よ、モイセイ及びイリヤ 現 れて、彼と與に語れり。時にペトル イイススに謂えり、
 しゅ われらここ お よ なんぢも ほつ われらここ みつつ いおり た ひとつ なんぢ
 主よ、我等此に居るは善し、 爾 若し欲せば、我等此に 三 の 廬 を建てて、 一 は 爾 の
 ため ひとつ ため ひとつ ため かれ なおい とき み ひか くも かれ
 爲、 一 はモイセイの爲、 一 はイリヤの爲にせん。彼が尚言う時、視よ、光れる雲は彼

ら おお かつくも こえ い これ われ しあい こ わ よろこ もの かれ き
等を蓋い、且 雲より聲ありて云う、此は我の至愛の子、我が喜べる者なり、彼に聴け。

もんとき ふふく おそ はなはだ つ かれら ふ い おそ おそ
門徒聞きて俯伏し、懼ること甚し。イエス就きて、彼等に觸れて曰えり、起きよ、懼

るな 勿れ。彼等其目を擧げて、獨 イエスの外に誰をも見ざりき。山を下る時、イエス

かれら いまし い ひと こ いま し ふくかつ さき み こと ひと つ
ス彼等に戒めて曰えり、人の子が未だ死より復活せざる先には、見たる事を人に告ぐる

なか
勿れ。

(比較用 口語訳) イエスはペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。ところが、彼らの目の前でイエスの姿が変わり、その顔は日のように輝き、その衣は光のように白くなった。すると、見よ、モーセとエリヤが彼らに現れて、イエスと語り合っていた。ペテロはイエスにむかって言った、「主よ、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。もし、おさしつかえなければ、わたしはここに小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、一つはエリヤのために」。彼がまだ話し終えないうちに、たちまち、輝く雲が彼らをおおい、そして雲の中から声がした、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。これに聞け」。弟子たちはこれを聞いて非常に恐れ、顔を地に伏せた。イエスは近づいてきて、手を彼らにおいて言われた、「起きなさい、恐れることはない」。彼らが目をあげると、イエスのほかに、だれも見えなかった。一同が山を下って来るとき、イエスは「人の子が死人の中からよみがえるまでは、いま見たことをだれにも話してはならない」と、彼らに命じられた。



しゅよ、こ う え い は なん ぢ に き し 、 こ う え い
主 光 榮 爾 歸 光 榮

は なん ぢ に き す 。
爾 歸

※聖体礼儀③ (金口イオアン) へ